

Biwako 24hours

夏の夜明け 5:00 am

まだ静まりかえった世界のなか

太陽が起きはじめて湖を照らす。

湖畔をすつと通り抜ける風は

天然のクーラーのように涼しく

夜明け前からびわ湖の漁に出かける

漁師たちの暑さをいやす。

はるか昔から変わらぬ美しい光景が

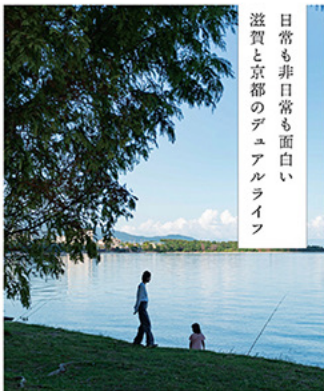
今も、これからも続いていく。



京都で会社を経営する貴浩さんにとって、湖西は自分らしくリラックスできる場所。「湖西線に乗って京都から帰る途中、びわ湖が見える瞬間に後援部がスコーンと空になる感覚があります。家でびわ湖をゴッポと眺めていられるのが幸せですね」。



「本戸に住んでいる人はみんな大好き」という本戸湖畔緑地は、光川さん一家も頻りに入り、湖の水に触れたり、移りゆく風景を眺めたり、ゆったりとくつろげる穴場スポットです。



日常も非日常も面白い 滋賀と京都のデュアルライフ

編集者として京都のクリエイティブ制作会社「パンク」を率いる貴浩さん、デザイナーとしての由貴さん、お二人とも以前は仕事中心の生活だったそうです。湖西に移住して日常が色鮮やかに変わったといいます。

「物を探しをする中で、条件として考えていた『近隣には、住居ロンの組みにくさや実際に暮らすハードルを考えると私たちがはるかに遠くで出会う今の家は、私たちが夫婦と同一の年の第40年、日本中どこでもありそうな中古住宅をリノベーションする方が面白そう！』と感じました（由貴さん）

「そして、この景色ですね。僕は滋賀のマチュピチュと呼んでいますが、湖田の土から眺めるとびわ湖まで見渡せて絶景なんです。湖西でも、なにもないような風景に見えるんですが、暮らしを豊かにするためのアイデアや知恵もたくさんあるんですよ。土の壁や石積み、DIYも、この地域に住まなければ、生やることができないと思います。暮らしのものに向き合う時間がある、やと人間らしさを取り戻せたかなと（光川さん）（貴浩さん）

貴浩さんの仕事は世界中で埋められている情報をつかり捉え、見方を

変えて新たな価値を生み出すこと。オフィスがある京都と湖西の拠点を行き来するなかで、編集者としての興味関心をもっと広げたいです。

「現在関わっている京都市の空き家対策プロジェクトは、新築や家のようなブランド化した住宅ではなく、この家のような家もきれいな中、住宅の価値を掘り起こしています。DIYしたり、暮らしを手作りするプロが多いこのエリアに住み出したおかげですね（貴浩さん）

一方の由貴さんは生活がたしなみ、京都ではファッションを聞いて、今までの生活スタイルも人が集まる広いテラススペースと花を飾るための床の間を確保しています。

「ここに住み始めてから、自然の情報は多量に手に入ります。初夏に青が咲いて、秋には桜や彼岸花、季節ごとにどんどん変わっていく様子は街中より刺激です」（由貴さん）

もちろん自然の豊かさだけでなく、比良おろしと呼ばれる無風や虫の多さなど、暮らしの面白さを感じて、それを含めてびわ湖と自然に近い暮らしに幸せを感じると、光川さん一家、暮らしと仕事、自然と都市、そのように感じ、環境が湖西にはあるように。

変化したよろこび

子どもたちはプールからびわ湖へ、移住してからより自然のアクティビティに興味を持つようになりました。今はいいモノはマイクろ力発電機や電動ノコギリなどのDIYアイテムと、カナディアンソー。どこかに出かけるのもいいですが、ここは毎日の暮らしの延長線上に非日常の楽しみがあります。

築約40年のレトロな昭和住宅を購入し、同じ湖西エリアに住む建築家ヘリペーションを依頼。もともと想定したところを大きな窓にしたことで、リビングからびわ湖と湖田が広がる開放的な空間に、近畿圏内大学の学生と主婦をDIYしたり、移住者仲間と京の石焼きを計画したり、いろんな人に巻き込まれながら家族づくりを楽しんでいます。

光川貴浩さん、由貴貴さん

パンク/代表/編集者、デザイナー

夫ともに滋賀出身（貴浩さんは湖南市、由貴さんは東近江市）。大学卒業後、京都へ。貴浩さんは仕事で東京に2年ほど住んでいたことも。結婚・妊娠をきっかけに滋賀へのリターン移住を考え、「びわ湖が見える・原産・古民家」という3つの条件で物件探しをスタート。約4年かけて理想の住まいを追い求め、2020年にびわ湖と湖田の景色が美しい今の場所に出会う。

移住者
インタビュー

湖東/湖南→京都→湖西

「本当に大切なものは何か
人生の価値をとらえなおす」

